

チェンマイ大学での貢献 (53)

伊藤信孝

チェンマイ大学客員教授・工学部

本報では、今では年間行事の恒例の一つになった新年会(New Year Party)での筆者のプレゼンについて報告する。本新年会はある教授の研究室の年間行事の一つであり、年始を祝うとともに、1月下旬に卒業が決定している学生へのお祝い、および既に卒業して社会人となった卒業生やその家族にも参加を呼びかけ、同級生とか同窓生という横の人的ネットワークに加え先輩や後輩と言った縦のつながりを拡大強化する目的もある。昨年1年間における研究室の活動をビデオにした報告に始まり、研究室の責任者である教授の挨拶の後に筆者の短い講話(Presentation)が予定されている。研究活動に活発なその教授の企画であり、目的は種々あるが要約すれば次のようになる。

- 1) 昨年1年間の活動報告と総括
- 2) 学部・大学院プログラムを終え、晴れて卒業・修了を迎える額英・院生へのねぎらい、祝いと励まし
- 3) 活動が顕著な学生・院生にはそれなりのギフトの贈与と表彰による更なる励まし
- 4) 同級生のみならず卒業生との出会いの機会を設け、人的ネットワークの拡大を図る
- 5) 情報交換

と言う事になる。

こうした趣旨・目的から考えるとどの様な内容の講話を準備すれば良いか自ずとわかる。筆者は概ね自分が生きてきた信条や経験してきた成功例か、どの様な心構えで、如何に対応すべきか等を筆者なりに「哲学」「精神」「生き様」として話題にしてきた。自らの1年間の活動を解雇し、明日からの未来にどの様に生きるかと言う現時点での思いなどをこれまでも話題にしてきた。と言って同じ内容を毎年話すわけにも行かない。これは自分なりに1年間でどの程度自分の考えが変化し、進歩したかをあらためて視るためにも極めて意義があると認識している。研究室の担当教授や卒業生からも祝辞や挨拶は聞けるので、筆者は特に次の3つについて話をすることにしている。

- 1) パーティに招待頂いたホストへの謝辞
- 2) 新年の挨拶
- 3) 卒業・修了を決めた学生・院生へのプログラム達成への祝辞
- 4) 筆者自身の信条・経験を踏まえた生き方についてのアドバイス

である。今年(2018)は特に「いついかなる時にでもすぐに対応できる準備を怠るな, **Be ready to take action not to miss the opportunity**」と言う趣旨の内容をいくつかの例を示して話すことにした。以下にその内容を示す。

ケース1 (**Case 1**): 修士課程の学生で、筆者の授業を履修した学生についてである。協

定締結大学の知人から「お宅の大学に連絡し、2名の学生に国際セミナーへの参加を尋ねているが未だ1名のみで困っている。このままでは締め切り日が来てしまうので至急参加者を探して欲しい」との依頼である。筆者はチェンマイ大学の教員では無いから、勝手な行動は慎まなければならない。かといって無責任に誰かに丸投げするわけにはいかない。仮にも依頼を受けた以上は責任を持った対応が必要と考え、締め切り1日前までは行動を起こさない様にした。言うまでも無くセミナーの趣旨目的などから、要請を受けた時点から意中の学生はいたが氏名や連絡先はわからない。自分の講義を履修した事があると言うだけでは極めて記憶も定かでは無い。顔は覚えていたが氏名は全くわからない。授業担当中には幾度か宿題を出してレポートをメールに添付して提出させていたが、誰が誰かは確認できない。そこで筆者が取った行動とは次のようである。その時の授業履修者全員にメールを配信し、「この学生に用あり、至急筆者宛に連絡するよう」要請した。幸い該当学生の写真を持ち合わせていたのでそれをメールに添付した。しばらくしてその学生から筆者宛に電話が入った。聞くところによると休暇で実家に帰っていると言う。事情を説明し「興味あれば即刻会いに来い」と言うので50kmほど離れた実家から急遽大学に出向いてきた。締め切り1日前のことである。筆者はあくまでも自分が主になってノミネートや推薦する立場にない事を承知していたので権限を超えたことはやってはいけないと心に刻み、その学生を担当の部署に案内し、係の方から説明をしてもらうように道筋をつけた。参加のための提出必要書類は、1) CV、2) 成績証明書、3) セミナーでの発表タイトルとその要約、4) さらには英語力を証明する証明書があれば添付、と言うものであったと聞く。翌日の締め切り日の午後にその学生が筆者を訪ねてきた。「先生、ありがとうございます。私はセミナーに参加できる様になりました」との報告である。「非常に良かった」と安堵すると共に内心「本当に良かった」と確信した。翌日もその学生が訪ねてきて「ありがとうございました」と言ってビニールの手提げ袋に入れた野菜を「お礼です」といって差し出した。聞いてみると「自分で育てた」と言う。心から農業に関心や興味がある学生であった。後で聞いてみるとチェンマイ大学からの参加者は彼の他にもう一人居て、それは女子学生であった。言うまでも無く当初から募集人員は2名であったが1名が不足であったために、締め切り日も迫っているので残り1名を至急探してくれとの要請が筆者にあったと言うことである。セミナーが終わってタイに戻った学生は挨拶に来て「非常に良かった、ありがとうございました」と頭を下げて謝意を表した。それから1ヶ月ほどしてセミナーを主催した大学から筆者に連絡があり、もう一人の女子学生だが、「指定した日時のフライトに乗らず、3日前にバンコックに出て時間を過ごし、その後国際便は指定のフライトを利用したことがわかった。何が目的で3日前にバンコックに立ち寄り時間を過ごしたのか明確な理由が無ければ国内線の航空料金の返還をしてもらわなければならない」と言う。これを聞いて筆者は極めて不愉快で残念であった。該当の女子学生がセミナー参加滞在中にセミナー主催の大学の担当者「なぜ確認しなかったのか？」と言う点である。「学生を送り出す側も受け入れる側も、いったい何をしているのか」と言うのが筆者の思いである。こうした事は日本の大学では珍しくなく、

いわゆる一括して責任を有する者が明確で無く、委員各自の職務に対する無責任さが企画事業の評価を低下させる。筆者はこうした事を幾度となく視てきた。「いい加減にして欲しい、未だにこのレベルか」との素直な失望感であった。しかし今更言っても遅い。国際交流事業に関わる教員も事務員も日本の大学ではこうした事が未だに珍しくない。事業の趣旨や目的も理解せず、自らがしなければならない業務すらこのレベルである。こうした事があっても大学のホームページやウェブサイトにはあたかも大々的に事業を成功裏に終えたなどとアップロードしているのが滑稽である。

ケース 2 : **(Case 2)** 筆者は常日頃から日本の大学の知人や教員（先生）に「アセアン経済共同体の発足に鑑み、アセアンからの留学生受け入れを優先的に考えるべき」と強調してきた。そうした事への理解もあって知人の一人から「受け入れても良いので優秀な学生を推薦してくれ」との返事を頂いた。修士課程からの受け入れなので現時点では学部 3 年生の終わりの状態であること、最終選考は学部 4 年生の成績を視てから判断する、と言うものである。早速チェンマイ大学のよく知る教員に連絡し、詳細を話してノミネート(Nominate) するべく協力を要請した。専門などの相違も若干あったが、応募に必要な書類を揃えるには 3 日とかからなかった。学生本人とその両親の了解を確認し応募書類を送付した。同時にその学生の専門といくらか異なる部分があったので予備知識としての習得が必要との判断から、その学生には 1 年間筆者の講義を聴講するよう指導教員に申し出た。もちろん非公式であり単位認定などは公式にはないし、出来ない。それでもその学生は出席した。1 年が経ち 4 年生の終わりが来て成績が出てきた。GPA (Grade Point Average)が高いほどよいが、出来れば満点の 8 割程度のレベルは欲しいし、推薦するからにはそれより低いのでは失礼と言う事にもなる。チェンマイ大学での GPA の満点は 4.0 であるからその 8 割というと 3.2 以上である。この学生は 2017 年現在、日本の受け入れ大学の修士課程にて勉学中であるが、将来的には博士課程に進み学位を修得してタイに戻って欲しいと願っている。この話のそもそものきっかけは知人からの情報の入手であり、こうした機会は何時やってくるかわからない。常に準備して対応できる体制にある事が如何に大切であるかを如実に物語る例である。こうした事態において配慮すべき大切な事は依頼されたからといい手自分勝手に事を進めないことである。必ず指導教員にもてる情報を共有してもらい、ノミネートしてもらうことである。理由は簡単である。自分が前に出て「私が世話をしたのだという自慢げな姿勢を見せること」が目的では無く、目的は優秀な学生が折角与えられた機会を逃さず留学できタイの将来を担う人材に育ってくれることだからである。筆者にとって自分が仲立ちして世話をしたと言うことを自慢げに話す必要は全く無いし、そうした姿勢は不必要な誤解を招く。自分のやっていることを自慢するための行為だと勘違いされることである。今更筆者にそうした万尾は不要であり、何が為にチェンマイ大学に実を於いて頂いているかと言う主目的を考えれば、それは相手大学や機関に対する 1 に貢献、2 に貢献以外の何者でもないからである。定年退職を終えた筆者にとっては名前も名誉も地位も必要は無い、目的を遂行するに足る身分を与えられ、おまけにいくらかでも報酬すら頂いている。それだけで

十分である。

ケース 3 : **(Case 3)** 修士課程を終える学生の一人に極めて優秀と思える学生がいた。GPA が 4.0 というから取得科目の全てが満点に近い。担当の指導教員もその優秀さは認識し、何とか博士課程にと考えていたが、どの様に進めるべきか戸惑っていた。筆者は学生本人と指導教員を伴い学部長を訪れ、大学からの奨学金の支給の可能性を問うた。学位取得後のチェンマイ大学での教員としての何年かの果たすべき義務などを了解し、関係者一同の合意の下に受け入れを尋ねた。受け入れ先の大学の指導教員となる教授からの受け入れは合意されたが研究計画がいささか不十分であった。さらにまとまったものを提出するよう要請されたが、さらに参考文献等を読み何が問題で、何をどの様に研究するのかと言う点が不十分であった。学生本人はどの様に考えたのかはわからないが、結果として研究計画の提出は出来なかった。それで話は終わった。なぜ提出できなかったと言うと、準備していなかったと言うのが素直なところであろう。急に「博士課程に行ってはどうか、貴方ほどの高い GPA なら問題は無い」と言う事で学生本人も予期していなかったのではないかと想像する。受け入れ予定教員から「もう少し参考文献も読んで、何が問題で、それをどの様に解決するか、についてさらに詳細な考えをまとめて提出すべし」との助言を得たが、本来考えても居なかったことで、急遽送り出す側の指導教員に聞いてもこのような分野がこれからは大事だからと言う助言に終わっているため、急に多量の文献を読む暇はない。結局提出できず話は消えたと言うわけである。問題の原因がどこにあるかという普段から教育（講義または授業）に於いて将来的人材育成に向けた情熱溢れる対応がしてないとこのようになるという例であろう。教員自らがそうしたビジョンを持っていないからいざという時に対応が出来ない。毎年ある関連分野の学会には必ず出席し、論文発表をして「あの大学には「※※先生という先生が居てこのような事を研究している」と言う程度に知名度がないと優秀な学生が現れても、どこに紹介や推薦をして良いのかの判断も出来ない。今回の話題の核心は常にいかなる場合にも対応できる準備態勢にあるべしというのはこのことである。

ケース 4 : **(Case 4)** 三重県の伊賀上野に”伊賀の里もくもく手造りファーム”と言う農業参加型観光施設がある。チェンマイにも”Dutch Farm”と言う類似の施設がある。最近オープンしたもので規模も伊賀の施設にほぼ同じである。オーナーはタイの伝統的な農法を残すと同時に未来の農業に向けた新技術を展示したいと考えている。施設内には研修所や宿泊施設も建設中で、さらに田舎の居住生活を満喫するためのコンドミニアムも建設したいと意気込んでいる。BOI (Board of Investment) に努める知人の紹介で是非オーナーに会って欲しいとの要請で度々訪れたことがある。ちなみに米国フロリダ州にある”Disney world”も顧客向けには種々の展示があるがその中には最先端のバイテクを使った技術で開発した品種などが転移されているが、舞台裏では大学院の修士課程や博士課程を終えた研究者がそうした研究に取り組み、成果のいくつかが展示されている。

さて上述の Dutch Farm からの帰途に立ち寄ったレストランで食事をし、展示してある店内の写真を見ていたとき、その写真の女性が筆者がよく知る知人である事がわかり、尋ねると

運良く在宅だという。早速訪ねると偶然とは言え良く来ていただいたと歓迎を受け、居合わせた来客を紹介された。来客はご夫婦で、話を聞き名刺を交換すると息子が同じチェンマイ大学で教員をしていると言う。そうしたきっかけでその後も数回自宅や農場にお招きを受け、「もし機会があれば息子をポストドクで海外の大学で研究活動をさせたい」と言う事であった。早々に知人に連絡を取り、受け入れの可能性を尋ねた。研究内容、専門分野のマッチング(matching)を考慮したうえで適当な受け入れ教員を探すとの返事があり、その旨を両親並びにその子息に伝えた。CV(Curriculum Vita)と成績証明書(Transcript)は入手したが、研究計画書の提出がない。応募締め切り内に提出すれば良いとの判断であっては困るので、早めに用意し事前に送付してどの教員に受け入れをしてもらえるかを判断してもらう必要がある。早急に提出せよと伝えたが、提出が無いままに応募締め切り日が来て、その年は応募は見送りとなった。二度と同じ事を繰り返さないようきつく指導し、両親にもその旨伝えたが反応は鈍くその意思がはっきりしない。結局何時までも待てないという事でこのときも駄目となった。この例に見る悪い部分は「一度こうした対応をすると将来的にも悪い影響が出る」と言う事である。応募希望の本人のみならず、中に入って動いた筆者やその問い合わせにまじめに対応してくれた相手大学の教員との間の信頼感も薄れ、ひいてはチェンマイ大学の評価も下がる。信頼感がなくなるとその後においても同様の話が出てきても取り合ってくれない状況に陥る場合が必ずある。後輩への影響も大きい。依頼した本人側から責任を持って迅速な対応を執行しないと多くの関係者が不必要に信頼感をなくすことになる。こうした事にどれほどのタイ人学生が気付いているであろうか。いや学生のみならず教員の中にも類似の対応が未だに見られるのは残念である。

ケース 5 : **(Case 5)** チェンマイ大学で毎年開催のJSPS(日本学術振興会)とのシンポジウムで筆者が講演発表を終わると一人の人物が接触してきた。意図するところは「日本の大学の博士課程で勉強したい」と言う事であった。その時もらった名刺が最後で、それ以後連絡は無い。自ら意思を表示して来た積極性は評価するとしても、その後のコンタクトが無いのはどういう意味なのか、「名刺交換したのだから後は貴方に頼む」と言う事なのか、どうも判断に苦しむ。本人からの接触が無いのにこちらから伺いを立てる気にはならない。モチベーションの高さも本人の意思確認の重要な要素の一つであるからである。

上記の例から、望み通りの結果になった場合を成功例、そうでない場合を失敗例とすると、ケース1, 2は成功例、ケース3, 4, 5は敗例と言う事になる。どうしてこうした結果が生じるかと言う原因は「意思表示をした応募者本人の対応の遅さ」にあると結論できる。迅速に対応をせず時期遅れの対応は「意思表示の真意を疑う」結果を招く。もっとも最優先で準備をしておかねばならないことは、最低限提出が必要な3つの書類(CVと成績証明書、研究計画書)のうち研究計画書の準備である。応募者本人が何をしたいのか、専門分野のみならず、研究テーマが受け入れ機関(受け入れ教員)の意図する内容に適合しているかと言う確認である。この部分での対応の遅さが成功と失敗の鍵を握る。勉強したい、研究したい

と言う「強い意志表示」が視られないと判断されると、受け入れ教員や中に入った仲介者を失望させると同時に疑念を抱かせる。「本当にやる気はあるのか？」と。一度こうした雰囲気が出来てしまうと何事においても懐疑的に成る。結果として、途中で話が頓挫して「失敗例」ともなれば、それだけでは済まない。応募者本人と仲立ちをした仲介人、そして仲介人と受け入れ教員との長年の信頼関係にも亀裂が入る。受け入れ機関からすれば「要請を受けて検討したが見かけによらない。これから貴方の言うことは余り信用できない」と言う事になる。全てが”受け入れ拒否”にならなくとも多かれ少なかれ「受け入れ」への躊躇につながる。事はそれだけでは無く、それ以後の「紹介」や「推薦」にもブレーキがかかる。そうした事を応募者は知るか知らないのか一向に動きが鈍い。また「紹介や推薦」の意味を理解していないようにみえる。一度お願いしたのだから後は仲介者がやってくれると言う安易な気持ちでの対応にも見える。忘れてはならないのは「応募者は誰なのか？」ということである。応募者本人の反応が遅ければ、「それは目的達成に向けた意思がみられない」と言う事になる。モチベーションが低いと判断されるのは極めて自然である。中には相談を受けたので紹介し、更なるフォローアップをしているにも拘わらず、同時平行で他機関への応募申請を考えていると言うふとどきな姿勢を示す者も中には見られる。そうした応募者が学生のみならず若い研究者や大学の教員にもいることはその大学の評価を落とすことにもつながる。そうした事への自覚や認識がないから「失敗例」という形になる。やはり躰（しつけ）教育(Discipline education)の必要・重要性を考えさせられる。こうした事例をプレゼンの "New Year Talk"で紹介し、更なる飛躍を促している。結論は以下の2枚のスライドで締めくくりたい。こうしたサポートにおいて筆者は自分が取るべき基本的スタンスを次のように定めている。自分自身の立ち位置は決して先頭に立たず、話が持ち上がった時点で必ず指導教員に話を通し了解を得る。そうした手続きを踏まずにノミネート(Nominate)も推薦(Recommend)もしないし、出来ないしと心得ている。自分はアウトサイダー(Outsider)であり、あくまでも支援と協力に徹することを旨にしている。客員教授の主たる在籍目的は支援協力以外の何物でも無いと考えている。頼まれれば一度として拒否したことはない。全てにおいて積極的に挑戦する姿勢を変えたことはないし、これからも変える気持ちはない。しかしあくまでも先頭に立つのでは無く補佐的立ち位置を忘れてはならないと心に戒めている。このことが本来の貢献でありそれ以外の何物でも無いと確信してやまない。

KEEP IN MIND
 Message to the young participants

- **You are strongly expected really, by those people**
- **Do your best so as not to disappoint the strong expectations of those people.**
- **This is important not only for those people, but also for yourself too.**
- **Create Thai original for sustainable development of nation**

Fig. 1 若い出席者へのメッセージ

CONCLUSION



- **Preparation for quick response should be always done**
- **Be ready to take action quickly, then the chance will come and smile to you.**
- **No need to keep standing still and Take action if you have such a time to do so**
- **Even for publication, no need to wait to be published, but more papers should be prepared and submitted while waiting**

Fig. 2 新年会での講演発表の結論

Fig. 1 は新年会に参加した若い世代の参加者への「心得メッセージ」である。一部補足説明が要るので加筆して解説を加える。タイのチェンマイ大学では王室のメンバーが卒業式にわざわざ足を運び卒業・修了生に直々に証書を手渡す。これを如何に解釈するかは個人差もあろうが筆者は国を挙げて新しい人材に大きな期待を寄せ手要る意志表示と理解して居る。子の背景に立ってスライドは説明している。すなわち国を含む多くの人々が貴方がたに大きな期待を寄せている。そうした人々の期待を裏切らないように最善を尽くして欲しい。この事はそうした人々のみならず、貴方がた一人一人にとっても重要な事である。持続可能な国家の発展のためにもタイ独自のもの"Thai Original"を築いて頂きたい。

Fig. 2 結論 常に即座に反応出来る準備をしておけ。じっとたたずんでいる暇があるのなら行動せよ、さすればチャンスは貴方に微笑みかけるであろう。博士課程の学生諸君に言いたい。論文掲載を心待ちするのでは無く、そんな時間があればその待ち時間の間にももっと論文を書け。いつも最低基準を満たすことで満足するな、と言いたい。